

8 月 3 日（木）午後 1 時～

福井国際交流会館



北陸新幹線の延伸を待つ新しい JR 福井駅から北東に程なくした場所に立地する、3 階建ての会場。全国大会も開催できる規模の立派な会場である。空いた時間に午前中に行われた北信越ブロックの会議場となった部屋を見る機会があったが、福井県の伝統工芸品が飾られたその特別室は、普通に生活する私たちはなかなか立ち入ることのできないと思わずにはいられない立派な部屋であった。海外の賓客をもてなすには十分すぎる施設であり、長野県にもこういう施設がほしいと、参加した 8 名の仲間はみんな思ったにちがいない。（ちなみに今大会は減免

で使用できたとのこと）。

ガラス張りの特徴ある建物の中には、小さな図書館が併設され、また、国際交流コーナーがあり、各国の民族衣装、道具などの展示が所狭しと並んでいた。この場所でパスポートの申請手続きもできるようである。



3 階の受付に上がる。結婚式の受付を思わせる豪華な受付。全体会場であるホールでは、福井県から各国に派遣された先生方が持ち帰った品物がこれまた所狭しと並んでいた。その充実ぶりに目を見張った。全体会場は、おそらく同時通訳できるシステムが整っている会場であり、国際会議にも対応できる会場であることをうかがわせた。その証拠に、会場を見渡す高い場所から目隠しのガラスを通して通訳者が通訳をするであろうブースが四方に並んでいるのを見ることができた。

◆会長あいさつ（出倉会長）

福井では平成 19 年以來の 2 回目の開催。福井県より派遣された人数は 82 名にのぼる。

◆来賓あいさつ（淵本 福井県教育庁企画幹）

ふるさとの教育とグローバルな教育をあわせていきたい。今秋、県内の全学校とネットワークでつながる。スカイプにより授業交換ができるようになる。

◆全海研会長あいさつ（滝会長）

子どもが幸せになる教育を。差別感のある（見上げた、見下げた）そういう目線はだめ。地域によってはその地域を見下げる、または見上げる。そういう教師を子どもたちは見て同じような目線を持つ。正常な目線を持った教員をひとりでも増やしたい。生きている限り子どもたちに還元していきたい。生涯、自分が動ける限り、教育に力を注いでほしい。（→参加した本県関係者 津澤写す）



◆各県の活動報告（各県の会長）

およそ、会員にいかに参加してもらおうか、といった課題は共通している。「日本人学校への道」と銘打ったチラシを全小中学校に配布し、それにより海外に行くことを希望した人も多いという、石川県の報告が印象に残る。

最後に本県・中川会長による、来年度の全国大会長野開催の強いアピールで締めくくった。

◆講演会 寺岡英男先生（福井大学副学長・国際地域学部長）

※今年度から立ち上がる国際地域学部長を務めている。

・福井県内には大学短大の受け皿が少ない。若い人たちが他地域へ流出してしまう。そこで、地域の創生・グローバル化の人材を発掘することをねらいとしてこの学部を立ち上げた。

・「国際地域」学部という名称

国際・・・シンガポール今は注目されているが、2, 30年後に待っている高齢化社会に向けて動いている。

地域・・・「ものづくり」の蓄積がある北陸地方。2回のオイルショックで大きな打撃を受けたのが北陸。

新分野、新素材で海外に進出したい、という企業もある。

国際と地域は、離れられないもの。切り離せないもの。国際と地域をそれぞれ冠する学部はたくさんあるが、両方がセットになる大学は少ない。そういう意味で注目を浴びている。

・高大接続 AO 入試については、高大連携が必要。入試と授業の二つの改革をすすめる。知識の伝達型でなく、課題追究型をめざす。しかし、これでは基礎的な学力が測れない。また、センター試験を課さないで、職業系の学校の生徒にもチャンスがある。入試において解き方のパターンが頭に入っていて、試験問題をそのパターンに当てはめる学生。こういう子は大学に来てから困る。グローバル人材の資質からすると時代遅れ。だからこそ、小中高入試のあり方、一体となって変えていかねば。このような入試改革をすすめていきたい。

・国際的に通用する教務システムの構築が足りない。相手方の学校に送り出した人数と同じ数の学生を受け入れる必要があるが、相手方の学校からこちら側の校務システムの足りなさを理由に受け入れを断られるということもあった。

◆海外研修報告 津澤が参加したのは以下の二つ。



(1) 『インドでの出会い』 坂東先生（福井市足羽中学校）
巧みな話術で聴く人を引き付ける。異文化に触れての感動、その地で生きる子どもたち、現地の人たちのたくましが伝わる報告であった。

(2) 『アメリカ現地校における教材指導法について』 金瀬先生（富山市立杉原小学校）

現地の先生方を招いての授業研究会について」。日本とアメリカ（州によって異なる）の教授法の良さ、教材の良さを再確認。

なお、別室では本県の山岡先生（ヒューストン補習校）による報告「シニア派遣の準備と補習授業校での実践」が行われていた。（左上写真）